

あ い さ つ

西東京市教育委員会教育長職務代理者
教育部長 手塚 光 利

西東京市立保谷第一小学校、栄小学校、青嵐中学校が、平成 22・23 年度の 2 年間、西東京市教育委員会研究奨励事業研究指定校として研究を積み重ね、大きな成果をあげられたことに対し、心から敬意を表します。

さて、教育基本法及び学校教育法の改正により義務教育の目的や目標が規定されたことを踏まえ、近年、小中学校の一貫教育や連携強化がより一層重視されています。その背景には、中学校 1 年生段階で暴力行為やいじめ、不登校傾向などの問題行動が急増する、いわゆる中 1 ギャップと呼ばれる現象などがあり、幼・保・小を含めた教育の連続性を視点とした円滑な接続の在り方についての見直しが求められています。各自治体では、小中一貫教育を教育計画に掲げ、抜本的な教育制度改革を行っている地域も多くあり、本市においても、中学校区の各校の特色ある教育課程を維持しつつ施設分離型の小中連携教育を基本として、平成 18 年度から小中連携校を指定して研究に取り組んできました。

小中連携を推進するためには、学力向上や健全育成の両面から相互の学校の取組を理解し、小中学校の教員が相違点を明らかにしながら学習観や指導観等を共有することが重要です。また、「中学校 3 年生の理想とする姿」を共通理解し、9 年間の一貫した指導過程を踏まえ、児童・生徒を主体としたカリキュラムや指導の在り方を見直し、全教職員が当事者意識をもって発達段階に応じた指導を行うことが最も重要であると考えます。

本市の小中連携校では、「生きる力をはぐくむ小中連携の在り方～3 校での生活指導・学習指導・特別活動のよさを生かして～」を研究主題に掲げ、小中連携の在り方を模索し、指導方法の研究に先進的に取り組まれてきました。特に、小中連携のために新たな取組を立ち上げるのではなく、すでに各校で実践している取組を整理して共有し、各校の取組に取り入れて共通実践して一体化を図っている点が優れています。また、各学年段階での指導の重点や身に付けさせる力を明確にし、段差をなくした滑らかなステップアップを重視したカリキュラムを開発して授業実践を行い、着実に実績を積まれてきました。これらはまさに、小中学校が一体となって生きる力を育成するための指導方法を追究した価値のある研究であり、本校の研究の成果が、市や都へと広がることを期待するところです。

小中連携の具体的な視点を示し、小中学校の円滑な接続を図るための学習指導・生活指導の在り方を追究し、教職員・児童・生徒の交流・連携を強化して教育活動の充実を図ってくださった島田 幸夫校長先生、矢野 尊久校長先生、河合 雅彦校長先生をはじめ、真摯に研究を進められたすべての教職員の皆様にお礼を申し上げます。また、ご協力をいただきました保護者や地域の皆様並びにご示唆いただきました講師の先生方及び関係各位には、本校に対する温かなご支援に心から感謝申し上げます。本連携校の研究が今後さらに継続され、充実と発展が図られますようご期待申し上げます。

は じ め に

西東京市立保谷第一小学校長 島田 幸夫

保谷第一小学校と栄小学校を卒業していく子供たちの多くが青嵐中学校へ進学していきます。このことは、児童・生徒は勿論、教員同士の「交流」が行いやすい素地となっています。この素地を活用して例年、3校の教員全員が持ち回りで一堂に会し、授業を参観した後に協議会を行ってきました。6年生の子供たち同士も中学校の勉強や部活等を見学したり、中学校のプールで一緒に泳いだりするような交流も長く続けてきました。夏季休業には、中学校の生徒が小学校のクラブ児童に手ほどきしてくれる活動も行われています。

この2年間の研究は、様々な「交流」を土台として、9年間を見据えた「連携」の在り方について考え試みることでした。大きな成果として、「中1ギャップ」にもかかわる「9年間の教科指導」にメスを入れられたことです。研究内容は、糸のような細くて頼りないものですが、今日までの成果を軸に今後の「連携」の在り方へつなげていきたいと考えています。

本研究に際し、御教示いただきました講師の先生方並びに様々な所で親身になって支えてくださってきた市教育委員会の諸先生方に心より感謝申し上げます。

西東京市立栄小学校長 矢野 尊久

小学校と中学校の指導方法や教職員の雰囲気の違いを表す場合によく「文化が違う」という言葉を耳にします。同じ公教育でありながら、小学校と中学校の違いが、進学する子供たちに混乱を与えていないか、いわゆる「中1ギャップ」のように大きな段差や障害になっていないのか、本研究はここを研究のスタートとし、スムーズな小学校から中学校の移行を目指し、「生きる力をはぐくむ小中連携の在り方」を研究してまいりました。2年間の研究において、3校で研究を進める中、学習、生活指導方法、特別活動のみならず子供たちへの教職員の対応にも様々な違いがあることが分かってきました。しかし、お互いが違いを違いとして認めながらよさを引き出して行くことの大切さを数多く経験いたしました。また、3校の教職員が9年間という長いスパンでの教育へと視点を置き換えることで3校の日頃の教育に実のある結果につなげることができました。1年目の3つの分科会から、2年目は学習活動に焦点化をするに至るまで市教育委員会をはじめ多くの方々の御指導・御助言に感謝申し上げます。

西東京市立青嵐中学校長 河合 雅彦

子供たちをよりよく育てていくためには、小・中学校一丸となった教育がとても重要です。これまで両小学校とは相互の交流に努めてきましたが、小中連携にかかわる研究指定校となったことで、新たに義務教育9年間を見据えた教育における問題等も見えてまいりました。

このことを踏まえ、2年間の研究を通して相互の違いは違いと認めつつ、同じ地域に過ごす子供たちが充実した学校生活を送れるよう研究に努め、細い糸ではありますが小学校2校と具体的な取組を実践してまいりました。今後もこれらの取組を継続・発展させ、この細い糸を幾重にも絡ませ、太い道筋を子供たちのためにつくっていきたいと思っています。

また、この研究が各校の教育を高め、さらには「中1ギャップ」という小学校から中学校への大きな壁の一部を取り除く一助になったと考えております。

結びに、本研究に当たり御指導くださいました関係各先生方はじめ、西東京市教育委員会の皆様方に感謝を申し上げます。